

2つの経済学と科学方法論

社会主義と自由主義（マルクス経済学と近代経済学）のいずれが科学（的）かを争う→判定のため、科学方法論の隆盛

論理実証主義（ウィーン学団） 主唱者ノイラートは、マルクス主義を科学の典型とし、社会主義計画経済をめざす研究・実践に従事

反証主義 ポパー ハイエクの盟友・科学的自由主義で対抗

論理実証主義・反証主義から、日常言語・言語ゲーム分析へ

ウィトゲンシュタインの前期『論理哲学論考』（誤読されて論理実証主義のバイブルとされる）→後期『哲学探究』『確実性の問題』

科学の中核にすら、実証も反証もされない世界像・信条があり、その内容は科学研究と日常生活とで全く同じではないにしろ、それらは人間のあらゆる活動において前提され、過去から受け継がれつつ徐々にゆっくりと変化し、時には短期間でかなり変わる（方法論では、クーン、ラカトシュ）。

ウィトゲンシュタインは、ハイエクとは親類、ケインズによってケンブリッジに招かれ、プラグマティックなラムゼイの影響やスラッファの批判によって、前期の言語観を捨てて思索。彼の哲学は20世紀哲学・経済学の中核に位置したと言えるのでは？

世界像・信条への着目は、マルクス経済学と近代経済学のいずれが真に科学的であるかを争い合うなかでしだいに忘却されてきた歴史学派・制度学派経済学のなかに、その萌芽があったといえるのでは？（ヴェブレンの「思考習慣」としての「制度」、ウェーバーの「エートス」など）

これからの経済学の課題

過去から受け継がれてきた世界像・信条が現在に生き、現在を規定→

その解明や再解釈は未来を生きるための指針のもとになる。

それらは乳幼児期以来、主に「家」（家族や家業経営体のこと）で身につける→「家」のありかたが社会生活全般を強く規定する。（核家族や直系家族 vs. 大家族→資本主義 vs. マルクス主義）

「経済 economy」＝「家」の秩序・慣習（οικος+νομος）→経済の原点に還って考える。

異なる「家」を持つ社会それぞれの独自性や、それらの間に共通する普遍性の解明

「日本らしさ」とは？ 等々

以上は、進化論的(evolutionary)アプローチと言えるだろう。

マルサス『人口論』が、ダーウィン・ウォレス進化論（自然選択説）のもと

マルサス：人口増（制約がなければネズミ算的）と食料増（等差数列的）によって希少性を内生的に説明した→ダーウィンらによれば、希少性は人間の経済問題への合理的アプローチ（ロビンズ、ミーゼス）の前提であるのみならず、生物進化全般の根本的な前提条件ということになる。自然界のなかで人間を特殊な存在とせず、人間も地上のあらゆる生物と祖先を同じくする一員であることを出発点として、経済学を再定義する必要があるだろう。（西洋では進化論と伝統的な教義との軋轢が多いので、日本にとって有利な課題では？）たとえば、牧畜・農業は、人間労働が主体の生産というより異種生物間の交換とみるべき（蟻もアリマキを飼い、キノコを育てる）。